

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

Dezember 2007

18

The German House in Naruto

発行日 2007年12月22日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町桧字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: <http://www.city.naruto.1g.jp/germanhouse/>
e-mail: doitukan@city.naruto.1g.jp

ザルツ・ザウ (塩猪) 像除幕式

平成19年5月15日

鳴門市市制60周年を記念して、ことし姉妹都市のリュネブルク市からザルツ・ザウ (塩猪) 像が寄贈されました。そして5月15日、その除幕式が多数の来賓を迎えて執り行われました。除幕の後、メトゲ・リュネブルク市長からのメッセージの紹介、主催者として吉田鳴門市長の挨拶があり、神戸・大阪ドイツ連邦共和国総領事からの祝辞 (代理ベーム領事アタッシュェ) と横井鳴門市議会議長の祝辞をいただき、すばらしいセレモニーとなりました。またひとつ、鳴門市とリュネブルク市との強い絆を示す記念物が増え、喜ばしいかぎりです。

ここでリュネブルク市長のメッセージの一部を紹介しておきます。

リュネブルクの歴史の始まりにザルツ・ザウは私たちの町に幸と富をもたらしました。お送りしましたこのマスコットが、貴市に同じように多くの幸をもたらしますよう願っています。



除幕式

ところでザルツ・ザウとはいったい何なのでしょう。ほとんどの方は全くご存じないことでしょう。実は筆者も知りませんでした。これは、リュネブルクの発展に大きく貢献したとされる伝説の動物なのです。ザルツとはドイツ語で「塩」、ザウとは「豚・猪」を意味しますが、これにはこのような伝説があ

るのです。

リュネブルクがまだ深い森と湿地に囲まれていた、今から千年前のことです。猟師が一頭の猪を追っていました。猪は心ゆくまで泥浴びをしたあと、日向に出て居眠りを始めました。すると黒い毛皮に覆われた体が真っ白になっていくではありませんか。猟師がその猪を射止めた後、よく見るとその毛皮にはとてもきれいな塩が結晶していたのでした。つまり、泥浴びをした場所には塩水が流れ出ていて、その塩水が猪の毛皮で乾いて白く輝いていたわけです。これをきっかけにリュネブルクに製塩業が始まり、この町に富をもたらすようになったのでした。

伝説の猪は塩で真白に変身したのですが、2000年にリュネブルクで開催されたザルツ・ザウ・パレードには、色とりどりにさまざまにペインティングされたものが登場しています。今回鳴門市に寄贈されたものも、同じようなものでしょう。これはスヴァンティエ・クローネという地元の女性画家が制作されたもので、身体の左側に鳴門市の名所や阿波踊りと人形浄瑠璃の木偶など、右側にリュネブルクを代表する中世以来の建物などいくつかのモチーフが描かれ、とても印象深い像だと思えます。

このザルツ・ザウは今、ドイツ館の玄関ホールに入った左手に置かれています。ドイツ館にお出での際は、ぜひご覧になっていただきたいと思えます。



ザルツ・ザウ

収容所遺構の発掘

『ルーエ』前号で鳴門市教育委員会の森さんが、ドイツ村公園の「ドイツ兵慰霊碑」が「県史跡」になり、さらに板東俘虜収容所関連のさまざまな遺産が「県文化財」に指定される可能性が高まっていることについて書かれています。これと関連し、教育委員会の手によって11月中旬から収容所跡地で、遺構の発掘作業が行われています。ひとつは慰霊碑周辺、もうひとつはかつての製パン所周辺です。

かつての収容所内には二つの池がありましたが、それらは今もほぼ同じ形状で残っています。そして土地の高い方にある池（上池）の畔にドイツ兵俘虜が板東（と丸亀及び松山）で収容されている時に亡くなった11人の戦友を弔うために建設した慰霊碑があります。慰霊碑そのものは建設された当時とほとんど変わらない姿です。ただ、その足下がコンクリートで塗り固められて埋もれてしまっているため、当時の姿と比較してみると少しアンバランスな感じになっていることが分かります。さらにその手前の石段は鉄平石に敷き詰められて、半分以上埋もれてしまっています。そして、この原稿を書いている段階では、この慰霊碑前の池に円弧状にせり出した部分の石積みがほぼ完全に残っていることが確認されています。当時の写真の石組みの発掘作業後に撮影した最近の写真とを並べておきましたので、比べてみてください。

昭和のころのドイツ村公園造営作業によって、建設当時の石組みなどが一部が隠れてしまっているのですが、それでも池の対岸から慰霊碑を眺めるとなかなか印象的な風景となっています。ただ、その手前に植えられている桜の木と夾竹桃が邪魔になっていること、現在のところ池の改修が完了していないため、作業車進入路の土盛りがその手前に見えて、見栄えが良いとは言えないのが残念です。写真は発掘作業で現れた当時の石組みとその背後の慰霊碑を写しています。今後ドイツ村公園「菩提樹の森」の整備が完了し、当時のように池に水が張られると、石組みと慰霊碑とが水に映えて美しく見えるようになるのではないかと思います。ただそれでも当時の写真と見比べると、当時の方がはるかに立派な景観を形成していることは明らかで、かつての公園整備でかえって慰霊碑が貧弱な印象になっているのは残念なことです。

収容所の建物の跡地については、下池の南側、かつて調理場



現在の慰霊碑



昔の慰霊碑

および風呂を収容する建物と製パン所の建物があったところで発掘作業中です。この部分では建物の基礎についてまだ具体的な成果はありませんが、水道管と見られる土管が見つかりました。その少し東側、従来「第二給水塔」と称されていた遺構を埋めていた土砂やごみなどが除去され、全体の様子がほぼ見えてきました。それによって、これは「給水塔」などではなく、むしろ「給水所」あるいは「水汲み場」というべきものであることが確認できました。第二次大戦後の昭和27年に建てられた給水塔がその横にあるために、あやまって「給水塔」という呼称がつけられたのでしょう。収容所時代の写真を見ると、給水塔などはまったくありません。下の写真は現在の状態を示しています。後世の自然石の石組みなどが見えて紛らわしいのですが、煉瓦積みの部分とその手前に見えるコンクリートのたたきと（わかりにくいですが）御影石が当時のものと思われる。当時の写真と照合すると、少し下へ降りていく石段があって、



給水所



給水所（昔）

左上の四角い煉瓦積み水槽の壁面下部に給水口がついていたようです。下の写真に当時の給水所が中央に写っていますが、この施設には屋根が水槽部分についていることがよく分かります。写真に見えると思いますが、現在でも煉瓦製の水槽の上部にアンカーボルトが埋め込まれた状態で残っていますから、おそらくこれで屋根を取り付けていたのでしょう。

ただ、この構造物にはもともとあったのか、後世に付け加えられたのか判然としない管などがありますし、水道管の配置がこの近辺でどうなっているかなど、全体的な解明はこれからとなります。

最後に、慰霊碑について最近おもしろいことを発見したので、ついでにご紹介しておきましょう。慰霊碑には上に述べたように11名の兵士の名前が刻まれているのですが、その中に丸亀で亡くなったテンメという人の名前も含まれています。彼の名前はドイツ語で書くと Amandus Temme となります。ところで、除幕式当日の写真を見るとたまたまその名前が写っているのは良いのですが、それには ANDREAS TEMME（碑文には大文字を

使います）となっているのです。この違いに気づかれた田村前館長からの指摘を受け、調査してみたところ、現在では正しく AMANDUS TEMME となっていました。ところが名前を刻んだ御影石の表面をよくよく眺めてみるうちに、AMANDUSの部分の他の個所より少しくぼんでいることに気づきました。つまり後になって間違いに気づき、表面を薄く削った後、名前を刻み直したということが判明したわけです。そのため字が他の場所にくらべ、いささか不鮮明になっていました。Andreas（アンドレアス）はドイツ人の名前としてはありふれた名前ですが、Amandus（アマンドゥス）は珍しい名前ですから、名前を刻んだ人が名前の綴りを見せられた時、よく確認もせずに早とちりをしてしまったのでしょう。

収蔵品紹介

ドイツ館には、板東俘虜収容所で製作されたものを中心とするコレクションが数多くあります。その中心となるものは、当時の写真や印刷物です。写真は収容所とその周辺の風景や俘虜たちの活動の様子を撮影したものだけでなく、徳島市などの都市部に収容所近辺の農村部の風景のみならず、ひとびとの生活を伝える貴重なものもあります。一方、印刷物は全国的に見て板東俘虜収容所でもっとも多く制作されたようであり、数多くあることが分かっています。残念ながら、ドイツ館に板東で印刷されたもの全てが収集されているわけではありませんが、それでもかなりの数があります。特に書籍類については一部のぞき、ほぼそろっているのではないかと思います。それに対し、収容所内で催された音楽会や演劇、演芸会、スポーツ大会などのプログラムは多いとはいえ、まだまだ追加したいものもたくさんあります。

さて、これらの印刷物のうち、書籍類については『ディ・バラック』を中心にいくつか常設展示場でその実物をご覧になれます。もちろんお手にとってというわけにはいかなくて、表紙や中の数ページ程度が見える程度ですけれど。一方、プログラムなどはドイツ館の所蔵する一部が展示されているにすぎません。それらは特別展示のとき以外、一般の方々の目に触れる機会がほとんどありません。なかなか美しいものも多く、見てだけで楽しいものなので、将来は展示替えやインターネッ

トを使った収蔵品の紹介を進めていきたいとは思っていますが、なかなかここまで手が回らないのが実情です。そこで、とりあえず誌上でその一端をご紹介していこうと思います。

今回は、板東俘虜収容所の印刷所で発行された種々のプログラムの中から、エンゲル・オーケストラの音楽会プログラムを二つご紹介します。エンゲル・オーケストラ自体の板東でのコンサートは徳島市内での和洋音楽会も含め、18回行われました。そのうちの今回は、板東での記念すべき「第一回コンサート」と「和洋音楽会」をご覧に入れましょう。従来、展示・紹介されるのは表紙の部分だけということが多いのですが、その内部や裏面に印刷されているものも載せてより詳しく内容を紹介します、和訳もつけておきます。



第一回コンサート

指揮

パウル・エンゲル氏

17年5月13日、日曜日

午後3時

バラック第1棟にて

板東

演奏曲目

1. 「アタリー」から神官行進曲 F.メンデルスゾーン
2. 歌劇「セビリアの理髪師」序曲 ロッシーニ
3. ワルツ「とても可愛い」 ワルトトイフェル
4. 歌劇「ファウスト」から幻想曲 グノー
5. 「ヘ調の旋律」 ルビンスティン
6. 「ウィンザーの陽気な女房達」メドレー ニコライ

このプログラムは二つ折りになっていて、1ページ目が表紙、3ページ目に曲目が裏表に印刷されています。表紙裏には何も印刷されていません。曲目を眺めてみると、現在はほとんど耳にしない1. のような曲もありますが、2. は今でも人気があります。作曲家のほうは、すべてクラシック好きの人ならば知らない人はいないでしょう。

和洋音楽会

(表紙の下部に次のように書かれている)

エンゲル・オーケストラ (板東俘虜収容所) コンサート

徳島にて

1919年3月



このプログラムは二つ折りの4ページもので、1ページ目に表紙、2、3ページ目に演目書かれ、裏表紙となる4ページ目は空白となっています。2、3ページはすべて日本語で書かれています。下の段の末尾に「俘虜印刷」とありますから、収容所内で印刷したことは間違いないと思われます。しかしこの部分については、原紙を「ガリ切り」をしたのは日本人でしょう。字体が日本語を書き慣れた人の手によることは一目瞭然です。おそらく収容所の職員なのでしょうが、実際のところは不明です。

ところで、表紙に大きく「和洋音楽会」とあるのですが、中のプログラムの冒頭には「和洋大演芸会番組」と書かれています。事実、音楽演奏だけではなく舞踊もありますから、「演芸会」とする方が実態に合っていますね。

「音楽部」のプログラムはクラシックと長唄という、今ではほ

とんどあり得ない組み合わせですが、いったいどのような雰囲気
の音楽会だったのでしょうか。なお「俘虜楽団」が演奏した
曲目については、このプログラムには簡単な名称しか書かれて
いません。ここでは紹介しませんが、別の史料からその時の曲
名や作曲家などの詳細が分かっています。

二番目の曲目は「忠臣蔵（独逸人作）」となっています。これ
は板東俘虜収容所の俘虜を支援していた神戸在住のドイツ人商
人のラムゼーガーという人が作曲した組曲で、エンゲル楽団は
この曲（の一部）をラムゼーガー夫妻が収容所を訪問した際
に行われた音楽会に取り上げています。ちなみに今から20年ほ
ど前、鳴門市の第6回「第九」交響曲演奏会でこの曲が70年ぶ
りに再演されましたが、ご存じの方は少ないかもしれません。

慰霊碑花参道づくり

ホワイトレディの会代表 石居 邦子

私たちホワイトレディの会員は、とくしま女性地域教育推進
者養成講座の受講生であります。

この講座の第4回目の課題はプラン作りであった。7～8名
の各班に分かれ、各々に好きなサークル名を付けた。私たちは
「ホワイトレディの会」とし、皆で計画を模索した。今年の3
月にドイツ館を退職した江川様の発案でドイツ村公園の花参道
作りをしようと決め、すぐに「パンフレット作り」にとりかかっ
た。講師先生のご指導と皆のアイディアで、この♪♪花参道作
りに参加しよう♪♪のボランティア募集のパンフレットが出来
上がった。

さっそく10月20日（土）午前10時、実践に移した。雨後の晴
天にも恵まれ、各方面からの多数のボランティアの方々のご協
力と市公園事務所の方の応援や植え付け土・肥料もいただき、
各自持参の草刈機、鎌、スコップを手に除草、整地をし、持ち
寄りの水仙の球根、アイリス、ピオラ、柳葉ルイラ草の苗を定
植し、12時過ぎに全員和やかに楽しく良い汗を流した後の美し
く整った花参道に満足し、次の奉仕日を平成20年4月29日とし、
解散した。

ご協力下さった皆様に心より感謝申し上げますと共に、次の
4月29日にも又よろしくお願い申し上げます。ほんとうにあ
りがとうございました。

(※ 記事にあります「花参道作り」へのボランティアを募集
しています。

連絡先： TEL 088-686-9603 江川)



清掃作業

新スタッフ紹介

いまさらの感がしないでもないですが、本年4月からの新ス
タッフの紹介を簡単にしておきます。

館長：中野 正司

鳴門市文化交流推進課課長の中野正司さんが兼任で館長に就
いております。

職員：橋本 信子

昨年度までの江川陽子さんにかわって、橋本信子さんが市職
員としてスタッフに加わりました。

非常勤研究指導員：川上 三郎

現職は徳島大学総合科学部教授です。ドイツ館にある資料の
研究と整理をするほか、ドイツ館を訪れるお客様や研究者に応
対して、館長のような業務も一部担当しております。

これまでの主な行事

(前号の「今後の行事予定」に記載のないもの)

- 5月15日(火) ザルツ・ザウ除幕式
7月19日(木) 独仏両大使来訪
10月7日(日) ドイチェス・フェスト in なると
10月20日(土) 2007年度鳴門史学会研究大会「板東に生きたドイツ文化」
10月27日(土)・28日(日) お茶会(国文祭関連の鳴門市行事)
11月3日(土) 「ドイツさん」朗読
11月9日(金) 人生 ～愛し愛されて～
11月20日(火)～12月25日(火) クリスマスポスター展
11月25日(日) 栗田美佐・新田恭子コンサート
12月9日(日) クリスマス会
12月15日(土) 友の会クリスマス会

今後の行事予定

- 2月4日(月)～24日(月) ドイツ観光ポスター展
2月10日(日) 佐藤安津子・角泰志コンサート
2月16日(土) バレンタインコンサート
3月20日(木)～31日(月)
戦争とドイツ平和村の子どもたち～東ちづる
絵本『マリアンナとパルーシャ』展
3月22日(土)・23日(日)
ドイツ国際平和村支援チャリティーコンサート

『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究 第5号』刊行

全国『研究誌』の「第5号」ができました。ご購入ください。1部500円です。

👁️ 編集後記

この『ルーエ』は、従来年4回発行されていて、本来ならば6月か7月にも発行すべきところでした。しかし編集者がまだまだ不慣れな上、他の仕事にかこつけて原稿書きを怠っていましたら、もう今年も最後の月になって、慌てているところです。ドイツ館脇の山の斜面では紅葉が盛りですが、ケヤキなどはほとんど葉を落としてしまいました。一方、俘虜たちもよく眺めていたであろう大麻山の方に目をやると、緑の中に赤や橙色の模様が見え、とても美しいです。

ドイツ村公園入口から慰霊碑にかけて、遊歩道が整備されてはいるのですが、除草などが追いつかず、特に夏前後の時期は下草がぼうぼうと生え、横からは木の枝がはみだすなど見苦しい状態になっていました。3月まで職員であった江川陽子さんにお世話いただいて、その部分の除草と花の苗や球根の植え付けをホワイトレディの会にさせていただきました。おかげで、今は気持ちの良い散歩道になっています。そこで会の代表の石居邦子さんに報告を兼ねて寄稿していただきました。

(川上記)